九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『平家物語』諸本における女人往生記述を俯瞰する（付 対照表）

森，誠子
九州産業大学 ： 准教授

https://doi.org/10.15017/4402938

出版情報：文獻探究. 58, pp.1-10, 2020-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『平家物語』諸本における女人往生記述を俯瞰する（付　対照表）

森　誠子

一　はじめに

中世における女人往生についての研究は、文学分野のみならず、宗教史・思想史をはじめ民俗学や芸能分野など、あらゆる分野で研究の俎上に上げられ、その研究の蓄積は膨大である。その中でも、先行研究を概観するに、『平家物語』に描かれる女人往生、特に、祇王・祇女・仏・閑及び建礼門院の往生の記述について、個々に取り上げられることが圧倒的に多いように思われる。そのため、『平家物語』全体から女人往生の記述を論じたものは多いといえず、主なものとして、覚一本を中心に考察した服部幸造氏（1）、延慶本を中心に考察した横山知恵氏（2）及び朴知恵氏（3）のご論が確認される。

先般、稿者は「『平家物語』は女人往生をどのように描いているか」という題目で執筆する機会を得た（4）。覚一本・延慶本という、『平家物語』研究において重要視されてきた一本における女人往生については、先学によりその特徴が明らかにされてきたため、拙稿では、多様な諸本を持ち多様な女人往生を記す『平家物語』について、諸本を俯瞰的に見ることによって、その表現特徴の一端を捉えた。しかし、紙幅の都合上、具体的にその根拠となる本文を取り上げるまでには至らなかった。加えて、原稿執筆に際し、事前に行った研究会発表で（5）、『平家物語』における女人往生の記述を一覧できる資料の貴重性について評価が得られたことも、本稿を成す一因である。

そこで、本稿では、平家にまつわる文芸テクストの展開の一様相を解明するための一助として、『平家物語』諸本に記される女人往生の言説を、人物・場面ごとに突き合わせられるようにしながら整理していきたい。なお、本稿は、『平家物語』諸本の言説を等価に並べるスタンスをとるものであるため、その配列意図は、諸本の前後関係や、各本の全編の特徴を追究しようとするものではないことを、ご了承いただきたい。

二　『平家物語』における女人往生概観

先行研究をもとに、『平家物語』に登場する女人のうち、往生したと指摘されるものについて、便宜上、覚一本における登場人物順に、一部はグループとしてまとめつつ、AからIの記号で表すと、以下の通りである。

A　祇王・祇女・仏・閑

B　鳥羽刑部左衛門妻母（袈裟御前の母）
C　小督
D　皇嘉門院
E　宇佐神宮神官娘
F　巴
G　千手前
H　建礼門院
I　阿波内侍・大納言佐

次に、対象とした『平家物語』諸本は、以下の通りである。なお、後掲の〔表〕における各本の略称を、墨付き括弧内に一文字で示す。

◎語り本系
〔一方系〕覚一本【覚】　流布本【流】
〔覚一本周辺の本文〕平仮名百二十句本【百】
屋代本【屋】
〔八坂系〕中院本【中】
◎読み本系
延慶本【延】　長門本【長】　四部合戦状本【四】　源平盛衰記【盛】

それら各本の記述内容を一覧にしたものが〔表〕である。異同の結果については、以下のような記号で示した。

○　往生したことを示す記述があるもの
△　臨終の記述があるも往生を示す記述が無いもの
▲　臨終についての記述が無いもの
×　当該箇所の記事が無いもの。ただし、F（巴）について【屋】は欠巻。

〔表〕

	【覚】	【流】	【百】	【屋】	【中】	【延】	【長】	【四】	【盛】
A	○	○	○	○（※1）	○	○	×	○（※2）	○
B	×	×	×	×	×	○	○	×	○
C	▲	▲	▲	▲	▲	○	▲	×	▲
D	×	×	×	×	×	○	○	×	○
E	×	×	×	×	×	○	×	×	×
F	▲	▲	▲	×	▲	▲	▲	▲	○
G	○	△	○	▲（※1）	▲	▲	▲	▲	▲
H	○	○	○	○	○	○	○	○	○
I	○	○	▲	▲	▲	▲	▲	▲	○

（※1）屋代本は「抜書」による。
（※2）四部合戦状本は「平家族伝抄」による。

三　『平家物語』における女人往生に関する表現について

〔凡例〕

＊『平家物語』の底本は以下の通り。

【覚】日本古典文学大系

【流】『平家物語　改訂版』梶原正昭校注（おうふう、一九九五年）

【百】新潮日本古典集成

【屋】『屋代本　高野本　対照　平家物語』（新典社、一九九〇～九三年）

【中】『校訂　中院本平家物語』（三弥井書店、二〇一〇～一一年）

【延】『延慶本　平家物語　本文篇』（勉誠社、一九九〇年）

【長】『長門本　平家物語』（勉誠出版、二〇〇四～〇六年）

【四】『訓読　四部合戦状本平家物語』（有精堂出版、一九九五年）なお「祇王」に関しては「平家族伝抄」『四部合戦状本　平家物語』（汲古書院、一九九七年）

【盛】巻四二まで『源平盛衰記』（三弥井書店、一九九一～二〇一五年）

巻四三から『源平盛衰記』（国民文庫刊行会、一九〇九年）

A　祇王・祇女・仏・閉

【覚】四人一所にこもりゐて、あさゆふ仏前に花香をそなへ、よねんなくねがひければ、ちそくこそありけれ、四人のあまども皆往生のそくはいをとげけるとぞ聞えし。されば後白河の法皇のちやうがうだうのくはこちやうにも、祇王・祇女・ほとけ・とぢらが尊霊と、四人一所に入られけり。あはれなりし事どもなり。（巻一）

【流】四人一所に籠り居て、朝夕佛前向ひ、花香を供へて、他念なく願ひけるが、遅速こそ有（り）けれ、皆往生の素懐を遂（げ）けるとぞ聞えし。されば彼の後白河の法皇の長講堂の過去帳にも、妓王・妓女・佛・とぢ等が尊霊と、四人一所に被レ入たり。難レ有かりし事ども也。（巻一）

【百】四人一所にこもりゐて、朝夕仏のまへに花香をそなへ、余念もなくねがひければ、遅速こそありけれども、四人の尼どもみな往生の素懐をとげけるとぞ聞こえし。されば後白河の法皇の長講堂の過去帳にも、「義王、義女、仏、とぢが尊霊」と四人一所に入れられけり。あはれなりしことどもなり。（巻一）

【屋】一庵室ニ閉籠リ、日夜朝暮ニ不レ懈、花香ヲ備へ、一心ニ弥陀ヲ念シケレハ、遅速コソ有ケレトモ、四人ノ尼共、遂ニ往生ノ素懐ヲ遂ケルトソ聞ヘシ。入道相国仏御前ヲ失テ、手ヲ分テ被レ尋ケレ共無リケレハ、「一定入道カ仏ハ、天狗ニ被レ取タリ」トソ宣ケル。遙ニ在テ聞出サレタリケレ共、「左様ニ思立テ浮世ヲ厭ハン者ヲ、中々兎角云ニ不レ及」トテ、其後ハ尋モ無リケリ。サレハ後白河法王ノ長講堂ノ過去帳ニ、「義王、義女、仏、閉等ガ尊霊」ト、四人一所ニ入セ給ケリト聞ヘケルソ忝ナキ。（抜書）

【中】四人ひとつあんしつに念仏して、たかひにわうしやうをいのりけるに、ちそくのふたうこそありけれとも、つゐにわうしやうのそくわいを、とけらるとそうけたまはる、入道

仏をうしなひて、手にてをわけてたつねさせられけれともなかりけり、しやうかいほとけはあまりに見めよかりつれは、てんくかとりたるにこそとのたまひける、其後やゝありてきゝいたされたりけれ共、さやうになりたらんするものをはとて、たつねられさりけり、かのちやうかうたうのくわこちやうにも、きわうき女仏とちらかゆうれいと、入られけるとそうけ給はる、あわれなりし事ともなり（巻一）

【延】隔テナク四人一所ニ勤メ行ヒテ、終ハ仏道ヲ遂ニケリ。サテコソ、後白河法皇ノ長講堂ノ過去帳ニハ今モ、「義王、義女、仏、閉」トハ読レケレ。（第一本）

【長】×

【四】四人尼公達此入道殿依二情縁一入二釈尊四部御弟子数一弥勤二称名念仏一祈二静海聖霊成仏得道一其後亦元暦二年乙巳年三月廿四日壇浦軍破平家一門皆亡時云二過去帳一作レ物念仏廻向折節奉二レ訪平家御一門頓證菩提同蓮成仏一其後不レ久文治五年二月彼岸中日十五日義王与レ仏同時遂二往生一其後亦不レ久建久元年八月彼岸中日十四日母杜持与二娘義女一亦同日異時遂二往生一乃往過去約束何許契四人尼公達為二一室勤行同法一難レ有遂二往生一彼等成二往生時一晴天紫雲靉雲上音楽澄亘山巌軒半仏壇不二云知一花共多雨敷五障女人誰可レ云雖二末代一信受称名故遂二往生一預二聖衆来迎一三徒苦何疑レ之雖二堯季一乗二観音花台一被二勢至授手一為二末代女人一叵レ有先規（族伝抄）

【盛】此尼上達四人、往生ノ志深シテ、行業功重リケレバ、遅速コソ有ケレ共、本意ニ任セ、終リ不レ乱念仏シテ、西ニ聳雲ニ乗、池ニ開ル蓮ニゾ生ケル。後白川法皇此由聞召、哀ニ貴事ナリトテ、六条長講堂ノ過去帳ニ被レ入テ、「比丘尼祇王廿一、祇女十九、閉四十九、仏十七」ト、今ノ世マデモ読上訪御坐ス事コソ憑シケレ。大安寺ノ過去帳ニモ入ト云云。（巻一七）

B　鳥羽刑部左衛門妻母（袈裟御前の母）

【覚】×

【流】×

【百】×

【屋】×

【中】×

【延】其後ハ天王寺ニ参テ、「只ハヤ命ヲメシテ、浄土ニミチビキ給へ。我仏ニナリテ、ナキ人ノ生所ヲモ求メツヽ、一仏蓮台ノ上ニ再行アワム」ト祈念スルコトナノメナラズ。サル程ニ次年ノ十月八日、生年五十五ニシテ終ニ往生ノ素懐ヲ遂ニケリ。（第二末）

【長】其後は、天王寺にまいりて、「たゝはやく命をめして、こく楽にみちひき給へ。仏たうなりて、こしやうをももとめつゝ、一はちすの中にさいくはいをとけむ」と、祈念する事をこたらさるほとに、いのる祈やみてぬらん、次の年の八月八日、しやうねん四十五にて、往生のそくはひをとけにけり。（巻一〇）

【四】×

【盛】其後母ハ尼ニナリ、天王寺ニ参籠シテ、「唯疾命ヲ召シ浄土ニ導給へ。救世観音太子聖霊、解ヲ開テ無人ノ生所ヲ求メ、一仏蓮台ノ上ニシテ再ビ行合ハン」ト祈念シケレバ、

次ノ年十月八日、生年四十五ニテ目出キ往生ヲ遂ニケリ。（巻一九）

C 小督

【覚】小督殿をとらへつゝ、尼になしてぞはなつ〔たる〕。小督殿出家はもとよりの望なりけれ共、心ならず尼になされて、年廿三、こき墨染にやつれはてて、嵯峨のへんにぞすまれける。うたてかりし事共なり。（巻六）

【流】何としてかは謀り出されたりけん、小督の殿を捕へつゝ、尼に成（し）てぞ追放たる。歳二十三、出家は元より望（み）なりけれども、心な（ら）ず尼に被レ成、濃（き）墨染に窶果（て）、嵯峨の奥にぞ被レ栖ける。無下にうたてき事ども也。（巻六）

【百】小督殿をたばかり出だして、尼にぞなされける。出家は日ごろより思ひまうけたる道なれども、心ならず尼になされて、年二十三にて、濃き墨染にやつれつつ、嵯峨の辺にぞ住まれける。

【屋】小督殿ヲタハカリ出シテ、尼ニソ成サレケル。出家ハ日来ヨリ思儲タル道ナレトモ、心ナラス尼ニナサレテ、年二十三、コキ墨染ニヤツレツヽ、嵯峨ノ方ニソスマレケル。（巻三）

【中】なにとしてかたはかりいたされたりけん、こかうのつほねをとらへつゝ、あまになしておひはなつ、出家はもとよりおもひまうけしみちなれ共、心ならすあまになされて、年廿三、こきすみそめにやつれつゝ、大はらのおくにそすまはれける（巻六）

【延】自ラカミヲシ切テゾステヽケル。小督局心ナラズ尼ニナサレテ、口惜トモ云計ナシ。「哀、嵯峨ニテ思立タリシ時、大原ノ奥ヘモ尋入テ、吾ト様ヲモカヘタラバ、心ニクヽテ可有ニ、無由ニモ再被召帰ニテ、恥ヲ見ツル悲シサヨ」ト歎給ヘドモ、甲斐モナシ。ヲシカラヌ命ナレバ、水ノ底ニモ入ナムト思立給ヘドモ、サキニモ人ノ云シ様ニ悪道ニ堕ム事、心憂ク覚ユレバ、「今生ハカリノ事、一旦ノ恥モナニナラズ。後生ハ終ノ栖ナレバ、浄土ヲコソ願ハメ」トテ、終大原ノ奥ニ分入テ、柴ノ庵ヲ結ビ、一向念仏シ給ケリ。露モ怠ル事ナク明シ暮シ給シガ、齢八十ニテ、日来ノ念仏ノ功積リ、臨終正念ニテ、往生ノ素懐ヲ遂給フ。（第三本）

【長】かみを切、あまになし、みゝをきり、はなをそきてをひはなつ。「入道、人倫の法としてなさけなくもし給たり。つみのふかさよ」と、人あさみ申て、たもとをしほらぬはなかりけり。さても小河の局、いかになり給ぬらんと、おもひやるこそむさんなれ。（巻一二）

【四】×

【盛】新尼御前ハ、出家ハ本ヨリ思儲シ事ナレ共、アヱナク人ニ姿ヲカヘラレテ、イカナル事ヲカ被レ思ケン。サシテ行ベキ方モオボエネバ、泣々嵯峨ヘ帰給フ。シバ〳〵爰ニ御座ケルガ、後ニハ大原ノ別所ニ閉籠リ、行澄シ給ケリ。御年廿三歳、シカルベキ形ナリ。（巻二五）

D 皇嘉門院

【覚】×

【流】×

【百】×
【屋】×
【中】×
【延】十二月三日、皇嘉門院失サセ給ヌ。御年六十。是ハ法性寺ノ禅定殿下ノ御娘、崇徳院ノ后ニテ御マシキ。院讃岐へ被遷御マシヽ時ノ御物思ヒ、何計ナリケム。思遣コソ哀ナレ。命ハ限アリ。思ニハ死ヌ習ナレバヤ、即御出家有テ、一向後生菩提ノ御営ヨリ外ハ、他ノ行マシマサヾリケレバ、院ノ御菩提ノカザリトモナリテ、吾御身ノ得道無疑」随テ、兼テ時覚ラセマシ〳〵テ、最後ノ御有様目出ク、仏前ニハ異香アリ。御善知識ハ、大原来迎院ノ本浄房堪慶トゾ聞ヘシ。昔ノ御ナゴリトテ残給タリツルニトオボヘテ哀也。（第三本）
【長】十二月三日、皇嘉門女院うせさせ給ぬ。御とし六十一。これは法性寺の禅定殿下の御娘、崇徳院の后、院讃州へうつされまし〳〵し時の御物思、いかはかりなりけむ。おもひやるこそあはれなれ。命かきりある御事にて、思ひにはしなれぬなれは、やかて御出家ありて、一向後生ほたいの御いとなみよりほかは、他事おはしまさゝりけれは、院の御ほたいの賁ともなり、我御身の御得道もうたかひなし。したかひて、時をおほえさせ給て、さいこの御ありさまめてたく、仏前に異香あり。御善知識には、大原来迎院の本成房湛敬とそ聞えし。むかしの御なこりとてのこらせ給ひたりつる、とおほえてあはれなり。（巻一三）
【四】×
【盛】十二月三日、皇嘉門院隠レサセ給ヌ。御年六十一。是ハ崇徳院ノ后ニテ御坐キ。御善知識ニハ大原ノ別所来迎院ノ本願坊湛快ゾ参給ケル。閑ニ最御目出クテ終ラセ給ケルゾ貴キ。昔御遺トテ是計コソ残ラセ給タリケルニ、世ノ習トテ哀ナリ。（巻二七）

E 宇佐神宮神官娘

【覚】×
【流】×
【百】×
【屋】×
【中】×
【延】サレドモ、ヤガテ御イトマヲ給ワ（ッ）テ、罷出ケレバ、清水寺ニ参テ、出家シテ、真如ト名ツキケリ。「過去帳ニ入ム」ト云ケレバ、戒師云ク、「過去帳ト申ハ、昔ガタリニナレル人ノ入ル札ナリ。現在帳カ」ト云ケレバ、真如、
アヅサユミ遂ニハヅレヌモノナレバ無キ人数ニカネテ入ルカナ
戒師哀ガリテ入レニケリ。此和歌ニヨ（ッ）テ、其後ハ過去真如トイワル。遂ニ別ノ男ニ合ズシテ、往生ヲ遂ト云ヘリ。今生後生之宿願、思ノ如シ。（第四）
【長】×
【四】×
【盛】×

F 巴

【覚】ともゑそのなかへかけ入、をん田の八郎におしならべ、む

ずとと（ッ）てひきおとし、わがの（ッ）たる鞍のまへわにをしつけて、ち（ッ）ともはたらかさず、頸ねぢき（ッ）てすてて（ン）げり。其後物具ぬぎすて、東國の方へ落ぞゆく。（巻九）

【流】巴其（の）中へ破（つ）て入（り）、先（づ）御田の八郎に押ならべ、むずと組（む）で引落し、我（が）乗（つ）たりける鞍の前輪に推つけて、些も不レ動、頸ねぢ切（つ）て捨（て）てんげり。其（の）後物の具脱棄（て）、東國の方へぞ落行（き）ける。（巻九）

【百】巴その中に駆け入り、恩田に押し並べて、むずと取つて引き落し、鞍の前輪に押しつけて、首ねぢ切つて捨ててけり。そのまま物具脱ぎ捨てて、泣く泣くいとま申して、東国の方へぞ落ち行きける。（巻九）

【屋】×（欠巻）

【中】ちからをよはす、あはつのこくふんしの御たうの前にて、物の具しつかにぬきをき、たちはかりをもて、東をさしておちゆくとそ見えし、ゆきかたしらすそなりにける、（巻九）

【延】鞆絵ハ落ヤシヌラム、被打シヌラム、行方ヲ不知ナリニケリ。（第五本）

【長】此ともゑは、いかゝ思けん、あふ坂よりうせにけり。のちにきこえけるは、越後国友椙といふ所におちとゝまりて、あまに成てけるとかや。（巻一六）

【四】鞆絵と云ふ女武者も、討たれや為ぬらん、落ちや為ぬらん、行方を知らず。（巻九）

【盛】和田合戦ノ時、朝比奈討レテ後、巴ハ泣々越中ニ越、石黒ハ親シカリケレバ、此ニシテ出家シテ、巴尼トテ、仏ニ奉二花香一、主、親、朝比奈ガ後世弔ケルガ、九十一マデ持テ、臨終目出シテ終ニケルトゾ。（巻三五）

G　千手前

【覚】千手前はなか〳〵に物思ひのたねとやなりにけん。さればは中將南都へわたされて、きられ給ひぬときこえしかば、やがてさまをかへ、こき墨染にやつれはて、信濃國善光寺におこなひすまして、彼後世菩提をとぶらひ、わが身も往生の素懐をとげけるとぞきこえし。（巻一〇）

【流】其（の）後、中將南都へ被レ渡て、被レ斬給（ひ）ぬと聞えしかば、千手の前は中々物思ひの種とや成（り）にけん。軈て様をかへ、濃（き）墨染（に）窶果（て）て、信濃の國善光寺に行澄（ま）して、彼（の）後世菩提を吊ひけるぞ哀れなる。（巻一〇）

【百】それよりしてこそ千手の前は、いとど思ひも深うはなりにけれ。されば、「中将、南都へわたされて、斬られぬ」と聞こえしかば、様を変へ、信濃の国善光寺に、行ひすまして、かの後世菩提をとぶらひ、わが身も往生の素懐をとげにけり。（巻一〇）

【屋】其ヨリシテソ千手前ハ、中々ニ思深クハ成ニケル。（抜書）

【中】千しゆのまへは、いつしか物思ひとやなりぬらん（巻一〇）

【延】又佐殿、千手ニ問給ケルハ、「中将終夜琵琶ヲ弾給ツルハ、何ト云楽ニテ有ケルゾ」ト宣ケレバ、「初ハ五常楽、次ニ皇麞ノ急ニテ候シガ、後ニハ廻骨ト云楽ニテ候」ト申。（第五末）

【長】千寿は、「おもはすに思て、物もおほせられ候はす」と申けれは、佐、うちわらひてそおはしける。（巻一七）

【四】兵衛佐、哀れみ奉り、件の美女を鹿野へ奉りたまひけり。此の女人と申すは、鎌田兵衛政清が憑みたりし鏡宿の遊女千鶴が娘、千手なり。色有りて情け深き女人なり。尓てこそ頼朝も、多くの人の中に、此の女人を択ばれけれ。敵なれども、是く芳心せられけるこそ珍重しけれ。（巻一〇）

【盛】中将第三年ノ遠忌ニ当リケルニハ、強テ暇ヲ申ツヽ、千手二十三、伊王二十二、緑ノ髪ヲ落シ、墨ノ衣ニ裁替テ、一所ニ庵室ヲ結ビ、九品ニ往生ヲ祈ケリ。（巻三九）

H　建礼門院

I　阿波内侍・大納言佐

【覚】かくて年月をすごさせ給ふ程に、女院御心地例ならずわたらせ給ひしかば、中尊の御手の五色の糸をひかへつゝ、「南無西方極樂世界教主弥陀如來、かならず引攝し給へ」とて、御念佛ありしかば、大納言佐の局・阿波内侍、左右によ（ッ）て、いまをかぎりのかなしさに、こゑもおしまずなきさけぶ。御念佛のこゑやう〳〵よはらせまし〳〵ければ、西に紫雲たなびき、異香室にみち、音樂そらにきこゆ。かぎりある御事なれば、建久二年きさらぎの中旬に、一期遂におはらせ給ひぬ。きさいの宮の御位よりかた時もはなれまいらせずして候なれ給しかば、御臨終の御時、別路にまよひしもやるかたなくぞおぼえける。此女房達は昔の草のゆかりもかれはてて、よるかたもなき身なれ共、おり〳〵の御佛事營給ふぞ哀なる。遂に彼人々は、龍女が正覺の跡をおひ、韋提希夫人の如に、みな往生の素懐をとげけるとぞ聞えし。（巻一二／灌頂巻）

【流】かくて女院は、空（し）う年月を送（ら）せ給ふ程に、例ならぬ御心地出來させ給（ひ）て、打臥させ給（ひ）しが、日來より思召し設（け）たる御事なれば、佛の御手に被」懸たりける五色の絲を罄（へ）つゝ、南無西方極樂世界の教主彌陀如來、本願訛（ち）給はずば、必ず引接し給へとて、御念佛有（り）しかば、大納言の佐の局・阿波の内侍左右に侍ひて、今を限りの御名殘の惜（しさ）に、聲々に喚き叫び給（ひ）けり。御念佛の御聲、漸弱らせ坐（し）ければ、西に紫雲靉き、異香室に滿（ち）て、音樂空に聞ゆ。限ある御事なれば、建久二年二月中旬に、一期遂に終らせ給（ひ）けり。二人の女房達は、后の宮の御位より附（き）參（ら）せて、片時も離れ參（ら）せずして候はれしかば、別路の御時も、遣方なくぞ被」思ける。此（の）女房達は、昔（の）草の縁も皆枯果（て）て、寄（る）方もなき身なれども、折々の御佛事營み給ふぞ哀なる。此（の）人々も、終には龍女が正覺の跡を追ひ、韋提希夫人の如くに、皆往生の素懐を遂（げ）けるとぞ聞えし。（巻一二／灌頂巻）

【百】女院、つひに建久のころ、龍女が正覚のあとを追ひ、往生の素懐を遂げ給ふ。「冷泉の大納言隆房の卿、七条修理大夫信隆の卿の北の方ぞ、最後までも御訪ひは申されける」とかや。（巻一二）

【屋】女院遂ニ建久始ノ比、竜女カ正覚ノ跡ヲ追ヒ、韋提希夫人ノ往生ノ素懐ヲ遂サセ給ケリ。冷泉大納言隆房ノ卿、七条修理大夫信隆ノ卿、此人々ノ北方ソ、最後マテノ御訪ハ被」

申ケルトソ承ル。（巻一二）

【中】女院は、いよ〳〵御念仏をこたらせ給はすして、つゐに龍女か正かくのあとををひ、いたいけふにんの、わうしやうをともなはせ給けるとそうけたまはる、あはれなりし御事也（巻一二）

【延】先帝ヲ奉テ始メ、一門一々都ヲ落テ、西海ノ浪上ニ漂テ、終ニ海底ニ沈給シ事共、只今ノ様ニ思食出サレテ、弥御歎ツキセズ、「何ナル罪ノ報ニテ、カヽル憂世ニ生合テ、ウキ事ヲノミ見聞覧。寂光院ニアラマシカバヨソ聞マシカ。指ガ是程目ノ当リハ見聞ザラマシ」トサヘ思食ゾ、責ノ事ト覚テ哀レナル。是ニ付テモ朝夕ノ御行法不怠。御年六十八ト申シ貞応二年ノ春晩ニ、紫雲空ニナタビキ、音楽雲ニ聞ヘテ、臨終正念ニシテ、往生ノ素懐ヲ遂サセ給ニケリ。御骨ヲバ東山鷲尾ト云所ニ奉納ケルトゾ聞ヘシ。今生ノ御恨ハ一旦ノ事也。善知識ハ是莫大之因縁ト覚テ、目出ゾ聞ヘシ。昔ノ如、后妃ノ位ニテ渡セ給ハマシカバ、女性ノ御身トシテ、争カハ彼法性ノ常楽ヲ証ゼサセ給ベキト哀也。「源平ノ相論出来テ、災ニ合セマシ〳〵ケルハ、偏ニ往生極楽之霊瑞ニテ有ケル物ヲ」トゾ、人申合ケル。サレバ日来ハ自利々他之行業、廻向ノ功力、冥途ニ到テ、御一類モ共離苦得楽、疑ヒ有ジ者哉。（第六末）

【長】平家都を落て、西海の浪の上にたゝよひて、先帝海中にしつませ給ひ、百官悉浪底にいりしこと、只今の様におほしめしけり。「いかなりける罪報にて、うき事をのみ見聞らむ」と、御歎つきせさりけり。されとも、山林の御すまひ、寂莫の境なれは、おほしめしなくさまるゝ事おほかりけり。峰にならへる梢をは、七重宝樹となそらへ、岩間をつたふ谷水を、八功徳水と観しつゝ、春の花、秋の月、山ほとゝきすにたくへても、西ふく風に心をかけ、御とし六十一と申、貞応二年の春のころ、むらさきの雲のむかひを待えつゝ、御往生の素懐を遂させ給けり。一期の御廻向むなしからされは、御一門の人々も、一仏浄土の縁、御疑あるへからす。昔の后妃の位におはしまさは、栄耀御心にそむて、御執心もおはしますへし。源平の逆乱に神をくたき、厭離穢土の御心さし、深かりけり。されは、悪縁を善縁として、遂に御本意を成就せられけり。ある人の云、「妙音菩薩の化身におはします」と云々。（巻二〇）

【四】平家の都を落ち、西海の波の上に漂ひつゝ、終に西海の波の底に沈みたまひし安徳天王の御事を、今の様に思食し［合はす］に付けても、弥御歎きも尽きせねば、「何かなる罪の報ひにて、斯かる憂き世に生まれ値ひて、憂き事のみを見［聞くらん］」。寂光院に在らましかば、外にこそ聞かまし。目の前にては見聞くまじ」と思［食］さるゝも、責めての事と覚えて哀れなり。之に付けても朝夕の行業怠らせたまはずして、御［年］六十七と申す貞応二年の春の暮、東山の鷲尾と云ふ［処］にて御往生有り。臨終正念にてぞ御在しける。紫雲空に◆（太＋しんにょう…稿者注）き、異香室に薫じ、音楽西に聞こえ、聖衆東へ来たりければ、終に往生の素懐を遂げさせたまふ。今生の御恨みは一旦の御歎きなり。後生成仏の［御］喜びは類無き御事ぞかし。

「善知識は是大因縁なり」と［経］文に在るも理かな。形容は咲ふが如くして、端坐して息絶えたまひぬ。則ち是、女人往生の規模は、末代の成仏の手本なりと云々。（灌頂巻）

【盛】平家都を落て西海の浪に漂、先帝海中に沈み給、百官悉亡し事只今の様に覚えて、其愁未やすまらせ給はず、如何なる罪の報にて、露の命の消やらで、又懸事を聞食らんと、不レ尽御歎打続せ給けるに付ても、朝夕の行業懈らせ給はざりけるが、御歳六十八と申し貞応三年の春の比、五色の糸を御手にひかへ、南無西方極楽教主、阿弥陀如来、本願悞給はず、必引摂し給へと祈誓して、高声に念仏申させ給て引入せ給ければ、紫雲空に聳き、異香空に薫じつゝ、音楽雲に聞ゆ。光明窓を照して、往生の素懐を遂させ給けるこそ貴けれ。二人の尼女房も、遅速こそ有けれ共、皆如二本意一、臨終正念に終けり。

泡沫無常の世の習、分段輪廻の里の癖、いづくか常住の所なる。誰も不退の身ならね共、上一人の玉の台より、下万民の柴の枢に至まで、今も昔も類すくなき事共也。されば女院の今生の御恨は一旦の事、善知識は是莫大の因縁なり、昔のごとく后妃の位に御座さば、争か法性の常楽をば経させ給べき、源平両家の諍ありて憂目を御覧じけるは、偏に往生極楽の勝因のきざしけるにこそと、心ある人は皆貴み申けるとかや。（巻四八）

注

（1）服部幸造「覚一本『平家物語』における女人往生」『国語国文学』二十三号（一九八二年八月）

（2）横山知恵「延慶本『平家物語』の女人往生」『名古屋大学国語国文学』一〇五号（二〇一二年十二月）

（3）朴知恵「延慶本『平家物語』に於ける女人往生」『文学研究論集』四十八号（二〇一八年二月）

（4）拙稿「『平家物語』は女人往生をどのように描いているか」松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘編『古典の常識を疑うⅡ 縦・横・斜めから書きかえる文学史』（勉誠出版、二〇一九年八月）

（5）「女人往生は中世文学においてどのように表現されているか―『平家物語』に関連する女人説話を事例として」伝承文学研究会第四五五回東京例会（於学習院女子大学、二〇一八年一二月）

附記　本稿は、JSPS 科研費・若手 19K13079「中世期から近世前期における平家物語にまつわる文芸領域及び文化の動態に関する研究」の助成を受けたものです。

（もり　さとこ・九州産業大学准教授）